

アマダイ通信NO.37

(Tile fish network letter)

03年紫陽花の季節に

知人・友人各位

前号で突然大腸癌の手術を知らされ驚かれた方も多かったと思いますが、今まで余り検査したことのない方は検査された方がいいかもしれません。切れれば済む大腸癌も腸閉塞や腸穿孔まで進むと難しくなります。下痢や便秘などの自覚症状のない内に発見できた●は、まだ死神には魅力ある存在ではないようです。

水仙の季節に入院し、お蔭様でどうにか今年も桜の木の下で散りゆく花を惜しむことができました。2ヶ月“娑婆”で元気に活動した後、遷り行く紫陽花の色を愛でる間もなく、術後の化学療法のため再入院し、二月ぶりにパソコンのキーボードを叩いています。一週間の予定なのですが、我が家の小平用水の土手の花は何色に変わっているのでしょうか。

冥途の土産に娘とアマポーラ咲く国へ

ここ数年、5月の連休はヨーロッパへ足を運んでいるので、今年はスペインへと思っていた矢先の癌の告知。3月にお腹を30センチも掻き切って、4月に退院できたとして長旅ができるのか。行けたとして脂っこい、肉中心の食事に病み上がりの腸が耐えられるのか。入院先の三楽病院の河野院長に訊ねると、大丈夫ですよと簡単に言う。大学の寮の先輩なので、できの悪い後輩に同情して冥途の土産にスペインくらい見せてやろうということなのか。そこで羽村で胃腸科・内科医院を開業する寮同期の山川君にも電話するが、大丈夫だよと太鼓判。

先輩と同期の名医二人に太鼓判を押され、万一のために娘を連れて行けばいいとようやく安心するが、折からSARSの嵐が吹く。病の身にはSARSも怖い、かつて胸躍らせたジョージ・オーウエルの「カタロニア讃歌」やヘミングウェイの「誰がために鐘が鳴る」の舞台、人民戦線の祖国に行ってみたい。建築業の端くれとしてガウディも見たい。入院前に予約する。アムステルダム乗り換えでマドリードに降り立ち、古都トレド、コルドバ、セビリアとドンキホーテの世界を南下、マラガ、グラナダ、バレンシアと陽光輝く地中海を横目に、バルセロナから飛び立つ。蒼い麦畑、オリーブとオレンジの丘、アーモンドの山も真っ赤に染める野生の芥子の花、アマポーラの絨毯を6日間で2千キロメートル走る強行軍。もっとも、地中海性気候の乾いた大地は湿潤な日本ほどに、植物がのさばることを許さないのだが。そんな乾きの中の強行軍にも病後の●の肉体は平気だが、娘はオリーブ油が合わなかったのか、体調をこわす。

今時人民戦線では売れないのか。反ファシズムを旗印に外人部隊が全世界から駆けつけ、オーウエルやヘミングウェイも従軍した、兵たちの夢の跡を、少しは迎えるかとの●の期待は外れ、遺跡とフラメンコ、美術館とパエリア、ガウディの建築を求めツアーはひた走る。スラリと健康的な姿態をくねらせ踊るジブシーの娘もなかなかセクシーだが、眼光鋭く、眉間に皺を寄せ、激しく床を打ち鳴らし、小山のような尻を微妙に震わせ、時に牝牛の如くダイナミックに跳ねる大年増の迫力には敵わない。生きることの辛さ、恋の切なさを歌う点でフラメンコもシャンソンも、日本の演歌も同じと思うのだが、演歌には反応しない大和撫子も、目を輝かせている。

ユーロで眠りから覚めるスペイン

中世にイスラムの支配を脱してヨーロッパに覇を唱え、コロンブスを先兵に中南米を植民地化し繁栄を謳歌したスペインだが、近世に入りイギリスに破れて以降、坂道を転げ落ちるように国勢を衰えさせた。フランコの独裁もあり、欧州のお荷物の感があったが、EU加盟以降、低コストを武器に外資を呼び込んで成長路線に乗り、ユーロへの通貨統合以降はその勢いが加速されているようである。町々にはあちこちにクレーンが立ち並び、地中海沿いには高層ビル群で構成される全く新しい都市まで創られている。

成長途上であればインフレも酷いのではと思うが、日本に比べれば物価は安く労働者の平均月収は20万円ほどで、それで十分やって行けるという。大学まで教育費はただで、通勤時間30分で3LDKくらいのマンションが首都マドリードでも千5百万円くらいで手に入る。頭金を作ってマンションを購入して結婚、リタイアする時にはローンも払い終えて、年金で十分暮らして行けるのだという。右肩上がりの経済と高い消費税がそれを可能にしているようだが、陽は沈み陽は又昇るということか。翻って、右肩下がりのデフレ経済と安い消費税の日本にも、再び陽が昇ることがあるのだろうか。

お酒を捨てますか？命を捨てますか？

退院間近かに、ようやく手術で取ったリンパ腺の検査結果が出る。遅いので悪い予感があったのだが、9個採ったうち3箇所には癌が転移している。抗がん剤を飲み続けるか、入院して点滴するか、あらためて問題となる。検査では肝臓や肺など他の臓器には転移していない。転移すればプラスとなる腫瘍マーカーも正常値だ。意見の分かれるところだ。羽村の山川君に相談する。5FU(フルオロウラシル)だけ飲むよりは他の抗がん剤も併用し血管に直接送り込む点滴療法の方が、5年生存(完治)率が高いという。

それになー、アドバイスが続く。今転移してないと言ってもリンパ腺まで行ってりゃ、体中を癌細胞がぐるぐる回り、取り付きやすいところを探しているんだ。人間にはわからないが、もうどこか巣食ってるかも知れないよ。転移しやすいのは肝臓だから負担かけないようにしないと。酒を止めるか人間を止めるか、突きつけられた気分だ。わかった、酒を飲まなきゃいいんだよな。土曜のその日から晩酌を止める。日曜も月曜も飲まない。火曜日に家族で美味しい中華料理を食べる。物足りない顔をしていたのか、紹興酒を飲みたいんでしょ、娘が言う。赤ワインはポリフェノールだから体にいいよ、娘の一言に押されてグラスで頼む。余り好きな酒ではないが、もう一杯飲む。薬だと言っても赤ワインもアルコールだ、2杯で止めにしよう。殊勝に最初は2杯で止めても、2杯が3杯に、赤ワインが白ワインになり、日本酒とビールまでレパートリーが広がるのに時間はかからない。それに好きな酒を我慢するストレスも体に悪い！なんてこじつけたりもする。

三日坊主の🍷にはスペインのワインが美味しい。海鮮などの炊き込みご飯のパエリアは名物料理だが、こちらはどうもいただけない。時に焦げ過ぎたり生煮えだったり、評価の分かれる点だ。粉っぽくて硬い名古屋の山本屋の味噌煮込みうどんをなぜかスペインで思い出す。それに、欧米でいつも感じるのだが、スペインも食事が単調だ。朝食がバイキングの時はいいが、パエリアならパエリアだけがドンと出て、後はサラダかスープに甘いデザート。バルセロナでようやく名物のパルに入っ、色々つまみながらワインを飲む。カウンターに大皿料理が並ぶ小料理屋のようで、なかなかいい。

リスクと選択、何のために・・・

前号の通信を見た三鷹寮同期の群馬県立癌センターの澤田副院長とはメールをやり取りする。このままで2年後に転移し再発する確率が30%、残り70%の人は再発しない。入院して抗がん剤を点滴する化学療法は、再発しない70%の人には無駄ということになるが、自分がどっちに入っているかわからないので、30%のリスクを避けようとしたら、点滴療法をした方がよいとのこと。

幸い経口の抗がん剤ではまだ出ていないが、点滴で大量の抗がん剤を直接血管に入れることになると、効果も大きいかわりに吐き気や倦怠感、食欲不振、脱毛などの副作用があって体力を消耗し、体力がないと時にそれが命取りとなる。プロ野球だって3割バッターはなかなかいない。30%もリスクがあるなら取り除かなくちゃと考えるか、70%大丈夫なら、副作用の強い治療は止めようとするか。月1週間の入院を5ヶ月繰り返すというのも痛手だ。クライアントにも迷惑をかける。それに退院後の2ヶ月間、週に2日ほど休肝日を設け、2次会も行かず、酒量も減らしているとはいってもあちこち飛び回り、手術前と同じように活動している。見た目には全くの健康体だ。入院した1ヶ月弱という時間と長さ30センチの大腸だけがダルマ落としのように弾き飛ばされて、上のダルマがストーンと落ち、何事もなかったように生活は又、回っているのだ。

データを集めリスクを判断し、といっても素人にできることはたかが知れているのだが、そのために医者がいる。最終的に選択するのは自身だ。まだ50才台半ばだ。今は“人生わずか50年・・・”と謡った信長の時代ではない。闇夜に鉄砲を撃ちまくる感もあるが、リスクを最少にするために入院することにする。ここまで生きたいように生きて来て、子供も大きくなり孫までいるが、まだやりたいこともあり、もっと他人の役にも立ちたい。人の世は浮世か憂世かと問われれば、団塊の世代を中心に年間3万人が自殺するという、生きていくのが難しい時代とはいえ、憂き世と感じてはいないということか。

ゼロ成長でも豊かな社会・・・21世紀資本主義の行方***都留先生語る

前号で“民主主義の危機と21世紀社会主義の可能性”について論じた。それは野放しの市場経済の暴走が耐え難い経済格差の拡大と社会混乱、人口爆発、エネルギー、鉱物、水等の資源の浪費と枯渇をもたらし、結果として社会システムの転換、人口と消費(資源浪費)の抑制を不可避にする。そのために際限なく膨らむかみえる欲望をセルフコントロールしうる人間像と社会システムの構築が不可避となるということであつた。さらにその鍵は、アナクロといわれそうであるが、儒教的な人間観とマルクスの社会主義の社会経済システムの結合にあるのではないかとの感を深くした。病床でそんなことを考えている時に「エコノミスト」4月8日号で経済学の泰斗、都留重人一橋大名誉教授の、標題の同誌80周年記念論文を目にして我が意を強くした。以下、なりに紹介してみよう。

「宇宙船地球号」の時代を迎え、世界のグローバル化が進むなかで、軍事・経済いずれの面でも卓越した先進性を誇るアメリカ合衆国の支配体制が、「グローバル化の内実である」(キッシンジャー)が、21世紀のかなりの長期を展望する場合の客体的規定要因としては以下の三つが重要である。第一は世界人口の動態である。国連の「世界人口予測」(02年版)によると、今の約68億人が50年には89億人に増加する。増加分は途上国で生じるが、その多くは50年間に一人当たりの生活水準を現在の先進国並みに高める。

技術革新の国際間伝播は現に非常に急速である。第二の規定要因は資源や環境の制約要因で、温暖化の問題、世界人口の40%が住む80カ国で直面する深刻な水不足もある。第三は科学の発展に裏付けられた技術の革新、「科学＝産業革命」である。その結果、労働と生産手段との間の生産の場での主従関係が逆転する。つまり生産工程で働く人の役割は、人類の長年の知識の凝結された機械の傍らで、それを監視するか統御するかのどちらかになる。この歴史的動向を、働く人たち一般が、社会的存在であることを通して技術革新の成果の媒介役を果たす意味で、マルクスは「社会的個体の発展」と呼んだが、21世紀にさらに普遍化する。

第一と第二の要因から、今後の経済発展が Sustainable(維持可能)なものでなければならぬということが要請され、そこでは「社会的衡平」が充たされるべきで、現に南北間に存在する著しい所得格差を埋めるべきである。それは途上国でのプラス成長と、先進工業国ではライフスタイルの質的变化を求め、慣例的な成長率計算ではマイナスを来たすかもしれない。又、第三の「社会的個体の発展」の結果、「技術の労働に対する要求が次々と少なくなるにつれ、ごく一般的な意味での資本財の役割は次第に大きくなり、従って(労働への支払いとして受け取られる所得に比べ)資本所得は相対的に増大する(レオンチェフ)。更にマルクスによれば「直接的形態での労働が富の偉大な源泉であることをやめてしまえば、労働時間は富の尺度であることをやめ・交換価値は使用価値の尺度であることをやめ・それとともに交換価値に立脚する生産様式は崩壊せざるを得ない」。つまり資本主義の本性 経済活動の単位である個別「資本」のダイナミックな活動動機は「利潤」で、その利潤は主として投資に向けられざるを得ない とは相容れない。労働の報酬が「労働の限界生産力」によって決まるという考え方は成り立たず、能力に応じて働き、必要に応じて購買力を与えられるような社会経済体制が、ふさわしいものとなる可能性が強い。

そうなれば「誰もが豊かに暮らすことができる時代はそう遠くはなく、我々は再び手段よりも目的を重んじ、役立つものよりも良きものを選ぶようになるだろう」(ケインズ)。それ自体が「目的」ではなく「手段」である成長率などにはこだわらず、「労働の人間化」と「生活の芸術化」を内実としたライフスタイルへの変革を可能にする新しい社会経済体制の創出が、今世紀、私たちの孫の時代の展望となることを、期待している。

廃棄物は宝の山 静脈産業を動脈産業に！・第36回Dネット政策研究会

講師：仲 雅之 同和鉱業(株) リサイクル事業部次長

産業廃棄物の不法投棄が各地で問題になり、処理に困っている自治体も多いと思いますが、視点を変えると廃棄物は宝の山。2度のオイルショックで競争力を失い窮地に立った日本の非鉄産業ですが、鉱山跡地や製錬所、精錬技術を産業廃棄物の処理に転用、環境産業として蘇りつつあります。

21世紀のリーディング産業たる産業廃棄物処理・再資源化の先頭を走る、非鉄大手の同和鉱業(株)リサイクル事業部仲雅之次長を講師にお迎えして、上記のテーマで話していただきます。産廃処理の現状とこれから、環境産業による町興し、産業構造転換、グローバル経済への貢献等色々議論できればと思います。

日時 6月26日(木) 18:00 受付開始 18:30 開始

場所 学士会館 (TEL03-3292-5931 営団・都営地下鉄神保町駅A9出口)

参加費 会員 2000 円 一般 3000 円 (軽食付き、終了後 懇親会 3000 円位)
申込み 事務局宛 fax03-3234-9026 e-mail: w-1942@ph.highway.ne.jp
若山 03-5228-4960 携帯 090-8452-2611 又は  事務所迄

黄土高原に汚水処理システム完成!

緑の地球ネットワークが、大同の環境林センターで建設を進めていた汚水浄化設備が完成し、稼働し始めました。大旱魃の 2001 年、センターは井戸水まで汚染され、育苗をはじめ苦境に立たされました。外務省草の根無償資金協力の援助で井戸を掘りましたが、毎年 2~3m も水位が下がるところですから、地下水を無神経に使うわけにはいきません。付近の碓房局住宅からの生活汚水を浄化して灌漑に使うことをあわせて計画しました。大阪産業大学の菅原正孝教授が現地調査のうえで土壌浄化の基本設計を行い、環境技術研究所が詳細設計に当たり、制御盤は会員の中村文生さんの手作りです。

処理槽は 26.5m×10m で、25m プールほどの大きさ。これで 1 日に 250 t の処理が可能です。地元の水道水監視網に処理水の水質検査を依頼したところ、次のような結果が出ました。() 内は中国の水道水の基準です。

COD 6.8mg/L(3mg/L)、混濁度 10.09 NTU(3 度以下)、色 5 度未満(15 度以下)、硝酸塩 0.9mg/L(20mg/L)、亜硝酸塩 0.055mg/L(0.15mg/L)、総大腸菌 230 個未満/mL (3 個以下)、塩化物 281.2mg/L(250mg/L)、pH 8.02(6.~8.5)、鉛 0.002mg/L(0.01mg/L) 砒素 0.003mg/L(0.05mg/L)、BOD 0.001mg/L 未満(0.001mg/L) (L=リットル)

最初に処理データをみたとき、何かの間違いじゃないかと思ったくらいです。COD(化学的酸素要求量)6.8mg/L は、中国の水道水の基準 3.0mg/L まであと一息。BOD(生物化学的酸素要求量)では 1 ケタも下のほうに相当します。灌漑用水としてはぜいたくすぎるくらいで「ペットボトルのビンに入れ、黙って食堂におけば、絶対に誰かが飲む」とセンターの職員が言います。簡単な再処理で飲用可能な所までいくでしょう。水質を少し犠牲にすれば、処理量を増やすことも可能です。

この施設の特徴は、高度処理に土壌浄化法を採用したことです。土壌のなかにはたくさんの微生物が生息し、その分解力を生かせば、良好な水質がえられることは広く知られています。しかし従来のやり方では効率が悪く、大量処理のためには広大な面積が必要でした。今回採用したのは、透水層(軽石)と土壌ブロックをレンガ積みのように多段に重ねる方式。それによって、本来の水質のよさと高効率を同時に実現したのです。

日本では国立公園のトイレなどで、水の循環利用に使われ始めた最新技術です。この規模のものは「世界でも初めて」というのが設計者の話。成功して本当によかった。運転を続ける内に微生物の働きが活発になり、これから水温も上がるので、水質はもっとよくなる可能性があります。苦労したのは、土壌ブロックの中味です。黄土は透水性が極めて悪く、また水にもろくて、この目的には最悪です。設計に当たった技術者が黄土を一目みて、「えっ、こんな土しかないんですか」とあきれかえったくらい。しかしこの地方の土はみな黄土です。植生調査の時もつねに土を探していました。ついにはトンネル工事の現場からも土を運んだのです。水の浄化に適当な土は、植物の生育にも最適な土。これまでの経験の蓄積があったからこそ可能になったと思います。制御盤を除いて資材はすべて現地のもので使いました。建設費も 400 万円ほど(現地での労賃と資材費のみ)。構造は簡単で、

運転にも特別の技術は不要です。たとえ故障しても、現地ですぐに対応できます。

4月13日、日本大使館の目賀田周一郎公使を迎えて、通水式をもちました。地元のテレビ、新聞で報道されましたが、口コミの効果はそれ以上で、試運転が始まってから毎日数組の見学者があり、「すぐにでも自分のところでつくりたい」という声があります。大同の水問題は本当に深刻です。そして大同は北京の水源です。水のリサイクル利用に道を開ければ、緑化以上に意味のある環境協力になるかもしれません。

詳しくは 特定非営利活動法人「緑の地球ネットワーク」(GEN)迄

Tel 06-6576-6181 Fax 06-6576-6182 e-mail : gentree@vc.kcom.ne.jp

ホームページ : <http://member.nifty.ne.jp/gentree/>

「ぼくらの村にアンズが実った」出版祝賀会のご案内

特定非営利活動法人「緑の地球ネットワーク」(GEN)の高見邦夫事務局長が99年から始めたメール・エッセイ「黄土高原だより」がこのたび『ぼくらの村にアンズが実った 中国植林プロジェクトの10年』(日本経済新聞社、千6百円+税)という本になりました。5月26日の朝日新聞「天声人語」や読売新聞の書評でも取り上げられたこの本を、すでにお読みになった方も多いかと思います。

黄砂の吹く大同から、小さな大阪の事務所から届けられる短いエッセイのファンの多くが心待ちにしていた一冊です。この本を読むと、緑の地球ネットワークが黄土高原で広げてきたのは「緑そして人のつながり」なのだと感じさせられます。この本が生まれたことで、さらに人々のつながりが広がって行くのだらうと思います。

この素敵な本の出版を記念して、著者の高見さんを囲む会を東京で催したいと思います。満開の杏の木の下で・・・とは行きませんが、杏のお酒(ビールでも紹興酒でも)とおいしい中華料理を食べながら、大いに語りましょう。

呼掛人：上田信、小畑勝裕、粕谷玲子、辰 紘、橋本紘二、干場革治、宮下利江

日 時：2003年7月9日(水) 18:30～

場 所：中華料理「三幸園」(千代田区神田神保町1 5 03-5280-1231 都営三田線・新宿線、地下鉄半蔵門線「神保町」駅A7出口、すずらん通り徒歩1分)

会 費：5,000円(学生4,000円)

申込み：☎事務所迄fax、電話又はE-mail tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp で。

その際、お名前、ご連絡先(電話・メールなど) ご所属をお知らせ下さい。

医療よもやま話・三鷹クラブ第49回定例懇談会

講師には昭和30年入寮の河野信博医学博士(三楽病院名誉院長)をお迎えすることになりました(三楽病院は☎の入院先で、大変お世話になっております)。プロフィールを同室だった中澤孝介さん(現在神戸在住、S34年工学部卒)にまとめてもらいました。

『明寮0号室は明寮の入口のそばにある15畳ほどの和室だった。ほぼ半世紀前、我々はこの部屋で1年間寝食を共にした。私と河野信博君との交友はこの時からである。我々はその場で勉強し、語り、寝た。それはまさに梁山泊であった。試験の時以外は、いやその時でさえも集まって談笑したり車座になってトランプのナポレオンに夢中になっている方が多かった。もちろん河野君もいつも加わっていたし、以前この会で講演した高島俊男君

もその一員だった。河野君の父君が医者であったことでもあり、彼自身は当然医学部進学
の積もりであったが、明寮0号室に入ったのが運の尽きで当時の医学部進学
の難しさを考えると最悪の環境であった。しかし、彼の凄いところは平然とむしろ朗らかにこの苦
勞をのりこえ難関の医学部医学科の入試に合格した。

医学部時代には演劇部に入り東京女子医大の演劇部で活躍していた医学生と知り合った。
その医学生が奥方である。ちなみに彼は二男二女に恵まれたが全員が医者として活躍して
いる。大学院卒業後、昭和43年から米国コーネル大学で2年有余肝臓移植の研究と臨床に
従事し、肝臓外科の専門医として活躍した。帰国後は東大で20年の教職生活を送り、この
3月までの10年間は東京都教職員互助会三楽病院の病院長として、また東京医科歯科大学
教授として活躍してきた。専門分野でも日本外科学会、日本消化器外科学会、日本消化器
病学会、日本肝臓学会、日本移植学会、日本生物臓器保存学会、日本成人病・生活習慣病
学会などの役員としてその存在は常に知られ、著書、論文も多岐にわたり、今後の更なる
活躍を私は期待している。私は医者ではないが、これらの煌びやかな肩書きは別にして河
野君は「名医」であると同時に「良医」であると確信している。それは半世紀に及ぶ彼と
の付き合いからである。良医を身近に友人としてもつことの大切さを痛感している。

あの我々が青春のひと時を過ごした三鷹寮はもう我々の記憶にしかない。遠ざかる記憶
とともに我々はどうしようもなく老いていく。自分の身体の不調について安心して相談で
きる医者がほしい。切実な願いである。その時には河野君を頼ってほしいと思う。彼なら
きちっと応えてくれるだろう。ただ、三鷹クラブという立派な組織があるので、平賀代表
には御苦勞ではあるがシステム化して頂ければありがたいと思う。』(中澤孝介記)

最近、私を含め、三鷹クラブのメンバーが医療に関し困った問題が起こった時、気軽に
河野先生に相談を持ちかけ、その都度迅速適切な対応をいただいております。事実上三鷹
クラブの医療アドバイザーのような役割を果たしていただいているわけです。今回は先生
の幅広い経験から「医療よもやま話」という題で、興味深いお話をいただくと大いに期
待しております。(文責平賀)

日 時 平成15年7月10日(木) 18時30分~21時 開場 18時

会 場 学生会館本館320号室(千代田区神田錦町3-28 TEL:03-3292-5931)

会 費 5,000円(会場費、夕食費等を含む)

申込先 干場革治 FAX 03-5689-8192 TEL 03-5689-8182 (有)ティエフネットワーク

e-mail : tfn-hoshiba@blue.ocn.ne.jp

病人の制服はパジャマ? ポケットが欲しい

2度目の入院前夜も赤坂の中華料理屋で、久しぶりにアメリカから帰った三菱化学の水
野凜一君を囲み、最初の駒場の中国語クラスの今年2度目のクラス会。紹興酒をたっぷり
飲み、朝慌てて自分で荷造り。スーツケースを引き単身で入院。パジャマにはポケットが
一つしかないからと、前開き、ポケット付のチョッキまで用意したはいいが、スリッパと
箸を忘れ、売店で買う。一日中パジャマじゃメリハリが利かないとジーンズの上も用意
するが、直ぐ抗癌剤のぶっ続けの点滴が始まり、コードでコンセントに、管でスタンドに
縛り付けられ、着替えなどではしない。

それもこれも暴飲暴食のせいと反省するが、続かない。これでは猿以下である。顧問先

の高橋カーティンウォールの高橋社長にも「干場、君生活習慣を変えなくっちゃ！」と説教され、能代高校の同期会でも「干場駄目だ！俺が預かる」と一升瓶を抱えた小野寺住友不動産常務から一杯ずつ貰う羽目になったのだが、術後も体調は変わらないので、いつの間にか元に戻ってしまった。幸い、このもって生まれた体力のせい、吐き気もおきず、食欲旺盛で、抗癌剤の副作用もみられず、ベッドの上でキーボードを叩いているのだが。

SARS とトイレ

中国の新型肺炎 SARS の流行も夏になりひとまず終息しつつあるが、中国の衛生状態からすると起こるべくして起きたという気もする。緑の地球ネットワーク(GEN)の大同での水の汚染問題に見るように、集合住宅に水洗トイレがあっても、その先の浄化施設はないに等しく、水洗トイレ自体も普及していない。北京や上海の街中でも高層ビルの林立する表通りから一歩小路に入れば、家々にはトイレすらなく、奥まった汲み取り式の暗く汚く臭いこと極まりない公衆トイレで用を足しているのが、現実である。半世紀前、日本も我々が子供の頃は赤痢や疫痢、腸チフス、日本脳炎、小児麻痺と感染症のデパートの感があった。そして●が初めて水洗トイレと出会ったのが、中三の東京への修学旅行である。使い方がわからなくて何度も鎖を引いたオチがつくのだが。これはタイなど東南アジアでも似たようなものである。二月に行ったチェンライの村でも手動式の水洗トイレが普及し、灌漑用水も発達して、掘れば直ぐ水が出てくるが、飲み水はポリタンで買う。水洗トイレの先が心もとなく井戸水が飲料に適さないからである。

それではアジアの国々で水洗トイレだけでなく欧米や日本のような下水道も普及させればいいのかというと、そうはいかない。水がないところでは非現実的であるし、膨大なコストがかかる。おが屑と微生物の協働で便を分解し、尿と共に肥料として使うエコロジカルトイレシステムや、水洗トイレのあるところでは GEN の浄化システムのように、土壌と微生物を使い、水を浄化・再利用する方式がいい。今回の場合、冬場の利用は想定していないので、零下数十度の大同で微生物が働いてくれるか難しいが、技術的には工夫可能だ。●も会員の日本トイレ協会にはそのような技術を持った会員が沢山集まっている。

中国から第二、第三の SARS を出さない、蔓延させないようにするためにも、中国のトイレ事情の改善は急務であり、日本の経験と技術は大いに役立つだろう。資金の不足するところでは ODA を使うのも一手であろう。トイレの利用者、浄化した水の利用者から、料金を徴収するシステムを作れば、ODA の返済も可能であろう。

お蔭様で事務所独立 2 周年

お蔭さまで情報仲介・営業コンサルタント業を開業して 7 年目、独立の事務所を開いて 3 年目。やらずぶったくりにもかかわらず、ご縁のある方々に応援していただいて、金になること、ならないこと、併せて情報を仲介。生業とも、生き甲斐ともさせていただいて、どうかここまでやってきました。事務所も東大三鷹クラブの事務所として機能、緑の地球ネットワークの東京事務所の役割も果たしつつあり、各種 NGO の拠点として更に発展させて行ければと思います。今後とも宜しくお願い致します。今年の「カモメール」の当選番号は●事務所の 3 年目の健闘を期して末尾 2 桁 0 3 とさせていただきます。景品は故郷秋田は八森町の鈴木水製「ハタハタ蒲鉾」とさせていただきます。 再見！